

英語教育における学習スタイルと適合性

——英語授業に対する大学生の適合感と好感度，効力感に基づく検討——

安藤 則夫^[1]，長谷川修治^[1]

[1] 植草学園大学発達教育学部

学習スタイルとは学習者の情報処理の仕方であり，それが授業のやり方に適合していれば，学習がうまく行くと考えられている。しかしながら学習スタイルに適合した学習の仕方をしていても効果が見られないという研究もある。そこで，効果のある学習と授業への適合の関連を考えてみた。今回は，大学生に中学・高校の英語の授業に対するアンケート調査をすることで，授業の適合感と好感度，効力感との関連性を解明した。その結果，この3つの感じ方は，共に否定的になる傾向があることが分った。また，情緒表現型は学習スタイルと関連し，緊張型の学生は理解重視，興奮型は活発な表現，ゆとり型は人間味ある理解を中心とする授業を適合していると判断した。英語教育での適合感は，学生の情緒表現型に合わせた授業を行うだけでなく，学生の情緒的経験を変えて学生が授業に合わせられるようにすることでも得られると考えられた。

キーワード：英語の授業への適合感，3つの情緒表現型，学習スタイル，好感度，効力感

1. はじめに

ながら，児童によりよい学習環境を提供する試みである。

1.1 英語教育を憂う

2020年から小学校での英語教育が本格化する。それに合わせて教材が作成され，それを補強する参考書も用意されてきた。しかし，安藤・長谷川(2018)のアンケートで示されたように，中学や高校の時の英語学習が嫌い・不得意であったという学生が8割を占めていた(77.2%，80.8%)。この現状を見ると，このままの状態では英語教育を小学校にまで単に延長させたとしても，英語が身に付かないのではないかと，むしろ英語を嫌う学生を増やす結果になってしまうのではないかと危惧せざるを得ない。

筆者らは，これまでに学生の英語に対する興味を引くように知的発達段階に応じ，かつ，記憶に残る小学生用の英語学習プログラムを作成してきた(長谷川・安藤，2014)。それは，教師の負担を軽減し

1.2 学生の学習スタイルに適合した英語教育

さらに，著者らは教材ばかりでなく，学生の学習スタイルに合った授業が大切と考えた。学習スタイルとは，「違う人は，違う仕方では情報を学ぶ」と考え，その学び方のことである(Pashler et al., 2003)。このように学習スタイルは人が個性として固定的に持っているものと捉えられる(Vermunt, 1996)。そして，固有の学習スタイルに適合した学習をすれば，学習内容を効果的かつ容易に学べる可能性が秘められている(Pashler et al., 2003)。これは，勉強が苦手だという学生に希望を与える考え方である。勉強がうまく行かなかったのは，自分の学習スタイルに合った授業を受けてこなかったからではないか，と考えれば，勉強が出来なかった責任は，適合した授

業をしてくれなかった学校側にあると考えられるからである。さらに、もし自分に合った授業を受けられればもっと勉強が出来るようになるかもしれないという希望も見えてくる。

従来は、授業を学生に合わせる場合でも、「誰もが興味を持てる授業」「誰もがやる気が出る授業」というように、個々の学生の違いには関係なく、学生の平均に合わせるという考え方が主流であったと思われる。このやり方では、平均から外れた学生は取り残される可能性が存在する。

1.3 学生が授業に合わせる学び方

講義形式の一斉授業は、学生が授業に合わせる形式である。勉強ができないと、それは授業に合わせられない（ついて行けない）学生個人の資質によるものと考えられやすい。その時の改善のための働きかけは、学生を授業に合わせるやり方になるだろう。例えば、学生を叱咤激励してやる気や興味を引き出して授業に乗れるようにするとか、学生を落ち着かせて集中できるようにするとか、将来の目標を持つようにして意欲を引き出すなどがその例である。学生を授業に合わせる様々なやり方が、使われてきたと言える。

しかし、最近では学生を授業に合わせられるようにするために、マインドフルネスの研究が注目されている。マインドフルネス訓練によって、脳の働きを変え学習能力を高めることが期待される (Lazar, 2005)。また、子どもらは落ち着き、社会性を増すことになり、学校での学習にも効果をもたらす。(Schonert-Reichl et al., 2015)。例えば、瞑想によって心の状態を鎮め、情緒的安定を得ることで学習に打ち込めるようにする考え方である。学生の心を授業に適した状態に変化させる働きかけと言える。

1.4 学生と授業の適合性の意味と有効性

学習の改善には、学生が授業に合わせるやり方と授業を学生に合わせるやり方があるということである。適性と処置の交互作用 (Aptitude-Treatment

Interaction, ATI) と呼ばれている (Bracht, 1970)。個々の学生の学習スタイルを変化しないものと捉えらると、学習スタイルに合った授業をするためには、授業の方を個々の学生の学習スタイルに適合するように変化させなければならない。逆に、難しい試験に合格しなければならない場合のように学習すべき内容が多く、かつ決まっている場合には、教師は学生の学習スタイルに合わせる余裕はなくなり、学生が授業に合わせて学習せざるを得ないことになる。英語教育の現状では、学生に合うように授業を変えた方がよいと思われるが、カリキュラムが決まっているので学生が授業に合うように学習しなければならない。そのことが、英語嫌いを生む一因となっていると思われる。

ただし学習の仕方が学生の学習スタイルに合っていると学習効果が上がるかどうかは分かっていない。学生の学習スタイルを「言語型・視覚型」に分けて言語型の学習と視覚型の学習をさせた場合、学習スタイルと学習型が合っていても、より良い学習効果が得られていない (Massa & Mayer, 2006)。

逆に学習は苦勞した方が身につくかもしれない。楽して得られた情報は、分かったつもりになっても、記憶に印象づけられないかもしれない。

さらに授業を好むことと授業が合っていることの区別が難しい。授業を好きだと思えば、それは自分に合っている授業と言えるかどうかは明確でない。学習スタイルに適合する授業という場合の「適合」の意味や意義が不明確なのである。

著者らは、もともと学習スタイルを変化しないものとはとらえず、情緒表現の仕方によって変化すると考えている (安藤・長谷川, 2018)。だから、学習スタイルを重視するにしても、学生も変え、授業も変えて学生に適合した授業を作るという柔軟な視点から、英語教育の在り方を考えたいと思っている。そこで基本的な問題である「授業が学生の学習スタイルに適合することが良い事なのか」を明確にする必要があると思われる。

現状では、適合性を客観的に評価できないので、

本研究では、学生自身が抱く「適合感」が、授業に対する好感度（好き嫌い）、効力感（授業内容が身についたという感じ）にどう関連しているか考察し、英語教育における適合感の意味や意義を明らかにしたい。

1.5 情緒表現型と情報処理スタイル

学習スタイル自体様々な説が提起されている。Coffield, et al. (2004) によると71のモデルがあるという。Scott (2010) のように学習スタイルと言っても、何を意味しているのか分からないと考えている研究者もいる。学習スタイルに関して広範な研究がなされ様々な定義が使われているが、核となる部分は、情報処理のスタイルであると考えられている(Cassidy, 2004)。著者は、情緒表現型によって異なる情報処理のスタイル（学習スタイル）を考えている。詳しくは、安藤・長谷川（2018）を参考にしていただくとして、ここでは簡単に概要を説明する。

情緒表現の型は、大きく分けて3つに分類できる。1つは、「緊張性の情緒」である。身体を固くして不快や快を表現する情緒で、注意を集中（狭小化）させ、認知を固く維持させる働きを持つと想定される。つまり、真面目に学習に集中する態度・納得した考えを固定的に保持し続け、それに基づく分析的思考を促進する。この情緒が優勢な人を「緊張型」と呼ぶ。

もう1つの「興奮性の情緒」は、身体運動を活発化して快不快を表現する情緒である。この情緒は、注意の転導を促し、多方面からの情報収集を助ける。この情緒が優勢な人を「興奮型」と呼ぶ。

最後の「弛緩性の情緒」は、身体をリラックスさせながら快不快を表現する情緒である。この情緒は、心のゆとり・安心感をもたらす、注意の幅を広げ、柔軟な思考や新奇な情報の受容性を増す。この情緒が優勢な人を「ゆとり型」と呼ぶ。

以上、3つの情緒は、各々が独占的に表現される人もいるが、普通は混合した形で現れる。従って、どの情緒が優勢かということで、情緒表現型を決め

ることになる。

情緒表現型の違いにより、情報処理の仕方や学習の取り組み方（学習スタイル）が異なり、適合していると感じる勉強の仕方も違っていると予想される。今回アンケートによって情緒表現型が予想するように学習スタイルに関連しているならば、情緒表現の仕方を変えることで、学生を授業に合わせるという働きかけが考えられる。

2. 目的

2.1 仮説の設定

次のような仮説を立て、検証することが目的である。

仮説1：授業が自分の勉強法に適合していると感じる場合、その授業が好きになるであろうし、学習効果も上がると感じるであろう。

この仮説が確かめられれば、学生の勉強の仕方つまり学習スタイルと授業が適合すれば、授業を好きになり英語能力を獲得する上で良い結果をもたらすと言える。

2.2 各情緒表現型に合った授業に関する仮説

学生の勉強の仕方と授業が適合していることが、英語の能力を高める上で重要であると分かれば、次に解明すべきは、どんな授業が学生に合っているかという点である。大きな仮説としては、「情緒表現型の違いによって適合する英語学習の仕方が違うだろう」がある。情緒表現型との関連で見ると、次のような仮説が立てられる。

緊張型の学生は、じっくり集中するので、筋道立った理解や思考を行う授業を適合していると思うであろう。

興奮型の学生は、多様に変化する社交的な活動を好むので、活発な表現を行う授業を適合していると思うであろう。

ゆとり型の学生は、ゆったりと情感を味わう活動を好むので、人間的な内容を感じ取る授業を適合し

ていると思うであろう。

最後に、それぞれの情緒表現型の学生が得意とする学習分野について質問する。

以上の仮説を検証し、予想も合わせて確かめたい。

3. 方法

3.1 アンケートの概要

2018年7月9日、心理学の「性格」の授業時間に、性格と英語学習の関連を調べ、最適な授業を構築するためと説明し、参加した学生にアンケートを依頼した。

3.2 アンケートの内容（英語授業への態度）

内容は、始めに中学・高校の時の英語の授業に対する好き嫌い（好感度）と英語力の獲得効果（効力感）、自分の欲する勉強法への適合感を質問した。また自分に合った勉強の仕方について7つの観点から質問した。さらに自分が得意とする活動に関する質問と、3つの情緒表現に基づく情緒表現型に関する質問を配した（参考資料1, 2）。

質問項目は、以下の通りである。

年齢、性別を問う質問。

『中学・高校での英語の授業が好きだった』に対して「かなりそうであった、まあまあそうであった、それほどでなかった、嫌いだった」の4つの選択肢から答えてもらった。

また『英語の授業で英語力が身についた』に対して「かなりそうだった、まあまあそうだった、それほどでなかった、ほとんど身につかなかった」の4つの選択肢から答えてもらった。

さらに『自分の勉強の仕方に合った授業を受けられた』に対して「かなり合っていた、まあまあそうだった、それほどでなかった、ほとんど合っていなかった」の4つの選択肢から答えてもらった。関連して、受けてよかった、受けたかった授業について自由記述式で答えてもらった。

本論では簡便化のために前の2項目を「肯定的」、

後の2項目を「否定的」回答とした。

3.3 アンケートの内容（自分に合った授業）

さらに、自分に合った授業に関して7つの観点から答えてもらった。それぞれの観点に関する3つの文章のうち最もあてはまるものを1つ選んでもらった。7つの観点とは、①授業で重視する形式（理解重視、行動重視、人間味重視）、②記憶の形式（一つ一つ記憶、浅く記憶、全体的記憶）、③興味ある学習活動（筋道立てた思考、意見交換、内容の鑑賞）、④望ましい学習環境（静かな環境、にぎやかな環境、和んだ環境）、⑤理解の仕方（筋道立った理解、直観的理解、概略的理解）、⑥時間の配分（まとまった時間持続、短時間で区切る、勉強時間を限定しない）、⑦好きな教え方（法則性の教授、面白い教授、人間味を感じさせる教授）、である。

3.4 アンケートの内容（英語授業での得意な活動）

また、得意な活動について、次の中から選択させた。すなわち「意味・用法を理解する」「内容を考える」「知識を覚える」「思いを表現する」「独自に発想する」である。簡単に表現すると、理解、思考、記憶、表現、発想のうちどの活動が得意かを聞いた。

3.5 アンケートの内容（情緒表現型）

さらに「あなたの情緒傾向を調べてみよう」という表題で、10の状況における行動の三択問題を提示した。この部分は、安藤・長谷川（2018）の内容と同じであり、回答の処理の仕方も同様である。

各々の枠の中に、「集中・固さの情緒（本論では緊張性の情緒）」、「注意転換・活発さの情緒（興奮性の情緒）」、「ゆとり・柔軟性の情緒（弛緩性の情緒）」という3つの情緒を基盤とする行動が書かれ、その中から一番自分に合う文を強制的に選ぶという形式である。例えば、最初の枠には「A読書や勉強、事務的仕事に集中できる。時間の立つことを忘れることが多い」「B読書や勉強、事務的仕事をする時、飽きやすいし、余分な考えが浮かび集中できない」

表1 授業に対する見方

情緒表現型		全体	緊張型	興奮型	ゆとり型	均衡型	複合型
人数 (%)		89(100)	22(24.7)	15(16.9)	18(20.2)	12(13.5)	22(24.7)
授業の好感度	肯定的	35(39.3)	7(31.8)	4(26.7)	10(55.6)	3(25.0)	11(50.0)
	否定的	54(60.7)	15(68.2)	11(73.3)	8(44.4)	9(75.0)	11(50.0)
英語力の獲得。 効力感	肯定的	35(39.3)	9(40.9)	5(33.3)	7(38.9)	3(25.0)	11(50.0)
	否定的	54(60.7)	13(59.1)	10(66.7)	11(61.1)	9(75.0)	11(50.0)
授業の適合感	肯定的	42(47.2)	11(50.0)	8(53.3)	7(38.9)	4(33.3)	12(54.4)
	否定的	47(52.8)	11(50.0)	7(46.7)	11(61.1)	8(66.7)	10(45.5)

「C読書や勉強，事務的仕事をして，何かが分かったりして，満足感を感じる」という3つの文がありどれか一つ選ぶ。10の枠があり，最後に選んだABCの数をそれぞれ合計し，下の枠にその数字を記入する。3つの枠の中で多い数字の枠が，各自の優勢な情緒表現型を示すようになっている。

10の質問のうちある1つの情緒表現型が他の型よりも2以上多ければ，その特徴を優位な特徴とした。組み合わせとしては，(10, 0, 0)，(9, 1, 0)，(8, 2, 0)，(8, 1, 1)，(7, 3, 0)，(7, 2, 1)，(6, 4, 0)，(6, 3, 1)，(6, 2, 2)，(5, 3, 2)がある。2つの情緒表現型の2つが共に優位である場合は，複合型とした。組み合わせとしては，(5, 5, 0)，(5, 4, 1)，(4, 4, 2)がある。その他，3つの情緒表現型がほぼ同数である場合は，均衡型とした。組み合わせとしては，(4, 3, 3)がある。学生全体に関する考察にあたっては，各情緒表現型と複合型，均衡型の合計結果を参照した。それぞれの情緒表現型と適合する英語授業に焦点を当てる時には，複合型，均衡型の学生の結果は省き，単独優位型の学生についてのみ考慮した。

3.4 倫理的配慮

アンケートを実施するにあたり，その趣旨と用途について学生の了解を得た。また個人情報には一切触れていない。

4. 結果

4.1 アンケート結果の概観

アンケートに回答した学生は，104人であった。15人は記入漏れがあり不採用となった。情緒表現型で見ると，緊張型は22人，興奮型は15人，ゆとり型は18人，均衡型は12人，複合型22人であった。なお，情緒表現型によって人数が異なるので，回答ごとに実数と各々の表現型の人数を母数とした百分率を示した。

表1を見ると，英語学習を好きでないと答えた学生は，60.7%であった。去年の調査の77.2%よりは低い，それでも約6割が好きでないことになる。授業が自分に合っていなかったと感じる学生が52.8%，英語が身に付いていない学生が60.7%とほぼ同率であった。好感度，効力感，適合感の間で比較すると，適合感が多少高めであった。

各型で見ると，好感度では，ゆとり型と複合型が高かった。効力感では，複合型が高かった。適合感では，緊張型，興奮型，複合型が高かった。

4.2 適合感，好感度，効力感の相互関連

英語の授業が適合していたと感じる学生の6割が授業を好きだった，効果があったと答えた。適合していなかったと答えた学生の8割が，授業を好きでない，効果がなかったと答えた(表2)。

表2 授業の適合感から見た好感度・効力感：人数（%）

全体 89	適合 42(47.2)	不適合 47(52.8)
好感度	肯定的 26(61.9)	肯定的 9(19.1)
	否定的 16(38.1)	否定的 38(80.9)
効力感	肯定的 26(61.9)	肯定的 8(17.0)
	否定的 16(38.1)	否定的 39(83.0)

授業が好きだと答えた学生の6～7割が、効果があり、適合していたと答えた。嫌いだと答えた学生では、8割近い学生が効果がなかったと感じ、7割の学生が適合していなかったと答えた（表3）。

表3 授業の好感度から見た効力感・適合感：人数（%）

全体 89	好き 35(39.3)	嫌い 54(60.7)
効力感	肯定的 23(65.7)	肯定的 12(22.2)
	否定的 12(34.3)	否定的 42(77.8)
適合感	肯定的 26(74.3)	肯定的 16(29.6)
	否定的 9(25.7)	否定的 38(70.4)

授業が有効であったと答えた学生では、ほぼ7割の学生が授業が好きであると答え、適合していたと答えた。

有効でないと答えた学生の8割近くが好きでないと答え、7割の学生が適合していなかったと答えた（表4）。

表4 授業の効力感から見た好感度・適合感：人数（%）

全体 89	有効 35(39.3)	有効でない 54(60.7)
好感度	肯定的 23(65.7)	肯定的 12(22.2)
	否定的 12(34.3)	否定的 42(77.8)
適合感	肯定的 26(74.3)	肯定的 15(27.8)
	否定的 9(25.7)	否定的 39(72.2)

4.3 受けてよかった授業についての自由記述

受けてよかった授業についての回答は少なく、下記の通りであった。

◎ ALT の英会話の授業

◎ メロディーや語呂に合わせて、単語・熟語を覚えた授業

◎ 自ら調べてまとめる授業

◎ 週2回単語テスト、高いレベルの問題をとく・・・

× だったところを調べて自分なりに説明する

◎ 一方的でなく、生徒に問いかけ、英語を話す状態の授業

4.4 自分に適合した授業

自分に適合した授業に関する学生全体の回答は、表5に示した。授業の形態としては、理解重視の授業が多くなっている。記憶の形態としては、要点をかつまんで記憶が適合しているという回答が多い。興味ある活動で見ると、論理的思考や意見交換よりは、内容を自分なりに理解するが好まれている。

学習環境としては、静かな環境が一番適合している。理解の仕方では、概略的理解が適している。時間的配分に関しては、ある程度まとまった時間勉強したい学生と短時間で勉強したい学生に分かれた。教え方では、きちんと教えてほしい要望が高いが、面白い話で楽しくするのが合っていると考える学生も多い。

表5 自分に適合した授業：人数（%）

①授業で重視する形式	理解重視	行動重視	味わい重視
	43(48.3)	28(31.5)	18(20.2)
②記憶の形式	個々に記憶	浅く記憶	全体的記憶
	23(25.8)	44(49.4)	22(24.7)
③興味ある学習活動	論理的思考	意見交換	内容鑑賞
	20(22.5)	27(30.3)	42(47.2)
④最適学習環境	静かな環境	賑やかな環境	和やかな環境
	39(43.8)	21(23.6)	29(32.6)
⑤理解の仕方	論理的理解	直観的理解	概略的理解
	23(25.8)	23(28.1)	41(46.1)
⑥時間の配分	持続的時間	細分化	限定しない
	41(46.1)	37(41.6)	11(12.4)
⑦好きな教え方	法則性の説明	面白い教授	人間味ある話
	42(47.2)	36(40.4)	11(12.4)

4.5 得意とする活動

回答者は57人と少なかった。理解、発想が比較的多く、記憶や表現が少なかった（表6）。

表6 得意とする活動 (人数)

活動	理解 (16)	思考 (11)	記憶 (9)	表現 (7)	発想 (14)
割合	28.1%	19.3%	15.8%	12.3%	24.6%

4.6 情緒表現型から見た適合する授業

授業形式で見ると、緊張型とゆとり型で理解重視が多く、興奮型で行動重視が多かった (表7)。

表7 情緒表現型別自分に適合した授業形式：人数 (%)

授業形式	緊張型 22	興奮型 15	ゆとり型 18
理解重視	10(45.5)	2(13.3)	10(55.6)
行動重視	5(22.7)	12(80.0)	2(11.1)
人間味重視	7(31.8)	1(6.7)	6(33.3)

記憶形式で見ると、緊張型で浅く記憶が比較的多いが、興奮型ではかなり多い。ゆとり型は、どの記憶の仕方も数はほぼ同じである (表8)。

表8 情緒表現型別自分に適合した記憶形式：人数 (%)

記憶形式	緊張型 22	興奮型 15	ゆとり型 18
個々に記憶	5(22.7)	1(6.7)	7(38.9)
浅く記憶	11(50.0)	12(80.0)	6(33.3)
全体的記憶	6(27.3)	2(13.3)	5(27.8)

学習活動の面から見ると、興奮型で論理的思考を選ぶ学生がいなかった。また、ゆとり型で意見交換が少なかった (表9)。

表9 情緒表現型別自分に適合した学習活動：人数 (%)

学習活動	緊張型 22	興奮型 15	ゆとり型 18
論理的思考	5(22.7)	0(0)	7(38.9)
意見交換	9(40.0)	7(46.7)	1(5.6)
内容鑑賞	8(36.4)	8(53.3)	10(55.6)

学習環境で見ると、緊張型とゆとり型は、静かな環境、和やかな環境が多かったが、興奮型では賑やかな環境が多かった (表10)。

表10 情緒表現型別自分に適合した学習環境：人数 (%)

学習環境	緊張型 22	興奮型 15	ゆとり型 18
静かな環境	10(45.5)	3(20.0)	12(66.7)
賑やかな環境	2(9.1)	7(46.7)	1(5.6)
和やかな環境	10(45.5)	5(33.3)	5(27.8)

理解様式で見ると、緊張型は論理的な理解と概略的理解が同程度に多かった。ゆとり型も似たパターンだが、概略的理解が多かった。興奮型は、直観的理解が多く、論理的理解はゼロだった (表11)。

表11 情緒表現型別自分に適合した理解様式：人数 (%)

理解様式	緊張型 22	興奮型 15	ゆとり型 18
論理的理解	9(40.9)	0(0)	5(27.3)
直観的理解	4(18.2)	10(66.7)	1(5.6)
概略的理解	9(40.9)	5(33.3)	12(66.7)

時間配分では、ゆとり型が長く勉強するが多かった。緊張型は、細分化した勉強も多かった。興奮型は、細分化して勉強がかなり多かった (表12)。

表12 情緒表現型別自分に適合した時間配分：人数 (%)

時間配分	緊張型 22	興奮型 15	ゆとり型 18
持続的時間	11(50.0)	0(0)	13(72.2)
細分化	10(45.5)	11(73.3)	4(22.2)
限定しない	1(4.5)	4(26.7)	1(5.6)

教え方で見ると、緊張型とゆとり型はきちっとした説明が多く、面白い教え方は2番目であった。興奮型は、面白い教え方が多かった (表13)。

表13 情緒表現型別自分に適合した教え方：人数 (%)

教え方	緊張型 22	興奮型 15	ゆとり型 18
法則性の説明	11(50.0)	2(13.3)	10(55.6)
面白い教授	7(31.8)	10(66.6)	6(33.3)
人間味ある話	4(18.2)	3(20.0)	2(11.1)

得意な活動では、緊張型は、理解・思考の順だが、興奮型は表現が多く、ゆとり型は理解が多かった。回答数が少ないので参考結果として見る。

5. 考察

5.1 適合感, 好感度, 効力感の相互関連

英語の授業に対する適合感, 好感度, 効力感, 共に否定的になる場合が多かった。嫌だと思ふことと効果がない, 合っていないという思いがかなり一体化していると思われる。肯定的な面でも, 共に肯定的になる傾向にあるが, 否定的な面ほどではなかった。仮説1は, 特に否定的な面で正しいと言える。

5.2 学生全体から見た適合した授業

適合した授業を概観すると, 理解重視, 浅く記憶, 内容鑑賞, 静かな環境, 概略的理解, 長い時間もいい短い時間もいい, 法則性が理解できる教え方か面白い教え方が良い, という傾向が見られた。しっかり分かるように教えて欲しいが, 浅く記憶し概略的に理解できれば良いと思っているようである。

また, 適合感には, 自分のやり方に合っている面と苦勞せずに来る面があるようである。例えば, どんな記憶の仕方が適合しているかという話題では, 「要点を浅く理解し記憶すること」が適合していると答えている。それが良い勉強法であると言うよりは楽な勉強法だから選んでいるのではないかと思われる。ここから適合感があっても, 最適な授業とは一概に言えないようである。

5.3 情緒表現型から見た適合した授業

緊張型の適合する授業は, 理解重視, 浅く記憶, 法則性の説明が特徴であった。もっと論理的な理解や思考が選ばれると予想したが, そうではなかった。「容易さを好む」という面が出たのかもしれない。

興奮型の適合する授業は, 行動重視, 浅い記憶, 賑やかな環境, 直観的理解, 細分化した勉強時間, 面白い教え方が特徴であった。活発な表現を行う授業が適していると予想されたが, ある程度あてはまると思われる。

ゆとり型の適合する授業は, 理解重視, 内容鑑賞, 静かな環境, 概略的理解, 長時間勉強が特徴であつ

た。ゆったりとした感じで人間的な理解を求めており, ほぼ予想通りと言える。

5.4 適合した授業をつくる

情緒表現型に基づく学習スタイルを想定して, 適合する授業について考えてきた。学習スタイルに合った授業が必ずしも良い授業とは言えないが, 少なくとも, 不適合感を持たせない方が好感度を上げ, 効力感を持つためには良いと思われる。

また, 学習スタイルに合った授業と言っても, 全員がそれぞれ個性的なスタイルを持っているわけではない。今回の結果でも, 単独優位型に選ばれたのは, 全体の6割である。4割の人は, 決まったスタイルはないことになる。教育の仕方を学生に合わせることは, 簡単なことではないことになる。しかし一般的に学生には融通性があり, 自分の学習スタイルに確実に適合した授業でなければ受けられないというものでもない。

そうであっても, 現実として同じクラス内に緊張型, 興奮型, ゆとり型の学生もいるわけであるから, 得意な分野の役割を与える授業も考えていいと思われる。例えば, 興奮型の学生はみんなの前で英会話の実演をすとか, 緊張型の学生には論理的思考を促す問題を出すとか, ゆとり型には内容についての感想を述べさせるとかである。授業内の活動を多様化させて個々の学生に合わせるという考え方である。

学生の方を変えて, 授業に適合させるという観点から言えば, 情緒表現型によって学習スタイルがある程度決まるということから, 情緒表現の仕方を変えれば学習スタイルも変わる可能性があると言える。例えば, 情緒的アプローチとしては, 授業に瞑想を取り入れたり, 楽しく持続的に筋緊張を高めたりして, 集中力を増すことが考えられる。

今まで学生を授業向けに変えることは, 説教や励ましなど認知的動機づけ的な観点から行われてきたが, 学習スタイルが情緒表現と関連している点を活用して, 情緒的コントロール, 情緒表現の面からも考えていくことが望ましいと考える。

6. 結論

まず、授業を好きになり効力感を持つためには、学生に授業に対する不適合感を強く持たせないことである。今までの英語の授業は、適合感への配慮が足りなかったのではないかと思われる。今まで以上に、授業と学生の勉強の仕方を考慮することが大切であろう。そのために、本論である程度示されたように学生の情緒的経験を変化させて学生を授業に合わせられるようにする方法も検討する価値があるだろう。これからもいわゆる学生の「心」を作ること、授業への適合感を増す考え方・授業方法を模索していきたい。

7. 謝辞

本研究は、植草学園大学平成 29 年度共同研究の助成から補助をいただきました。ここに記して謝意を表します。

文献

- 安藤則夫, 長谷川修治 (2018). 英語学習における弛緩性の情緒の役割—大学生における英語学習評価と情緒表現型の関連性からの検討—, 『植草学園大学研究紀要』第 10 巻 63-72.
- Bracht, J. (1970) Experimental factor relating to aptitude-treatment interactions. *Review of Educational Research*, 40(5), 627-645.
- Cassidy, S. (2004), Learning Styles: An overview of theories, models, and measures. *Educational Psychology*, 24:4, 419-444,
- Coffield, F., Moseley, D., Hall, E., and Ecclestone, K., (2004), Learning styles and pedagogy in post-16 learning: A systematic and critical review.
- 長谷川修治, 安藤則夫 (2014). 学習効果の高い小学生用英語教材の開発—その詳細説明と試用試験による検証—, 『植草学園大学研究紀要』第 6 巻 27-36.
- Lazar, S. W., Kerr, C. E., Wasserman, R. H., Gray, J. R., Greve, D. N., Treadway, M. T., McGarvey, M., Quinn, B. T., Dusek, J. A., Benson, H., Rauch, S. L., Moore, C. I., and Fischl, B. (2005). Meditation experience is associated with increased cortical thickness. *Neuroreport*; 16(17), 1893-1897.
- Massa, L. J., and Mayer, R. E. (2006). Testing ATI hypothesis: Should multimedia instruction accommodate verbalizer – visualizer cognitive style? *Learning and Individual Differences*, 16, 321-335.
- Pashler, H. McDaniel, M., Rohrer, D., and Bjork, R. (2008). Learning Styles: Concepts and Evidence. *Psychological science in the Public Interest*, 9, 3, 105-119.
- Schonert-Reichl, K. A., Oberle, E., Lawlor, M. S., Abbott, D., Thomson, K., Oberlander, T. F., and Diamond, A. (2015). Enhancing cognitive and social-emotional development through a simple-to-administer mindful-based school program for elementary school children: A randomized controlled trial *Developmental Psychology*, 51(1), 52-66.
- Scott, C. (2010), The enduring appeal of 'learning style', *Australian Journal of Education*, 54(1), 5-17.
- Vermunt, J. D. (1996), Metacognitive, cognitive and affective aspects of learning styles and strategies: A phenomenographic analysis. *Higher Education*, 31, 25-50.

参考資料 1

自分に合った授業・勉強について。各枠内で最もあてはまる文 (A, B, C) に○をつけてください。

A.	自分は、じっくり集中して聞き勉強することを好むタイプ (理解重視) である。
B.	自分は、アレコレ変化に富んだ勉強や授業を好むタイプ (行動重視) である。
C.	自分は、内容を味わいながらする勉強や授業を好むタイプ (人間味重視) である。
A.	慣れない単語・文を繰り返し練習し、1つ1つ記憶することが得意である。
B.	要点をさらりとかいつまんで理解して十分と思い、記憶は不得意である。
C.	単語・文の細かい意味は気にせず、全体の内容を記憶する方が得意である。
A.	表現の仕方を1つ1つ調べてじっくり筋道立てて考えるのが好きである。
B.	内容に刺激されいろいろな発想があり、発表・意見交換するのが好きである。
C.	人の感じ方・生き方を感じ取り、自分なりに内容を納得するのが好きである。
A.	英語の勉強に集中したいので、静かな環境の方が勉強しやすい。
B.	静かだとかえって落ち着かず、にぎやかな環境の方が勉強しやすい。
C.	英語の勉強では、親しい人がいる和やかな雰囲気の方が勉強しやすい。
A.	前から後ろに順に展開する形で、筋道だつて次々と内容を理解する方である。
B.	重要と思われる単語や文を直感的に理解し、まとまらない感じで理解する方である。
C.	全体を意識しながら、単語・文を読みおおよその意味を理解する方である。
A.	英語の勉強はじっくりやりたいので、まとまった時間をとって勉強する。
B.	英語の勉強は浅くさらりとやる方で、いつも短時間で終わることが多い。
C.	英語の勉強は情感を味わう方で、勉強時間以外にふと考えることが多い。
A.	知識が整理され法則性が理解できるような教え方が好きである。
B.	面白い話を連発させて笑いが絶えないような教え方が好きである。
C.	穏やかに深い人間味を感じさせるような教え方が好きである。

参考資料2 性格特徴を知るためのアンケート用紙

あなたの情緒傾向を調べてみよう。各枠内でよくあてはまる文 (A, B, C) に○をつけてください。

A.	読書や勉強, 事務的仕事に集中できる。時間の立つことを忘れることが多い。
B.	読書や勉強, 事務的仕事をする時, 飽きやすいし, 余分な考えが浮かび集中できない。
C.	読書や勉強, 事務的仕事をして, 何かが分かったりして, 満足感を感じる。
A.	失敗すると腹立たしくなり, いつまでも原因をくよくよと考える。同じ失敗はしたくない。
B.	失敗すると腹立たしくなり, 歩き回ったり他のことをするなど落ち着きがなくなる。
C.	失敗すると悲しくなるが, 気を取り直しじっくりと考えて失敗しないようにがんばる。
A.	自分の得意分野の時は, 調子よく持論を話す, それ以外の話題では静かにしている。
B.	人の話を聞いていろいろ思いつき, 気軽に思いつきを喋る。にぎやかな会話を好む。
C.	話すときは, 相手の気持ちを考えながら, 感心したり共感したりして, 会話を楽しむ。
A.	部屋は, きちんと整理整頓するのが好きで, 散乱したモノや汚れが気になる。
B.	部屋は, たくさんのモノが乱雑においてありまとまらない。片付けなさいとよく言われる。
C.	部屋は, 大雑把に用途別に分類してモノを置いてある。ときどきは整理して満足する。
A.	1人でコツコツと好きなことをするのが好きで, 人とのつきあいで疲れを感じやすい。
B.	いつもと違うことをするのが好きで, 知らない人が来てもテキパキと対応できる。
C.	休憩を間に入れながら物事に取り組む。親しい人とのなごやかなつきあいを好む。
A.	これはきちんとして, 徹底してやりたい, とこだわる活動がある。
B.	様々な活動を, いろいろ思いを膨らませながら, 楽しむ。計画通りにはできない方だ。
C.	好きなことは, いくつか工夫したこと, いいと思うことをしみじみと感じながら行う。
A.	雑音は, 何かに集中していると気にならないが, 気になり出すとイライラする。
B.	雑音で気が散りやすく, 立ち歩いたり, 他に何か面白いことはないかと考える。
C.	雑音は聞こえても, 気にならない。騒音の場合には, 何か対策を考える。
A.	人から, マイペースだとか自己中心的だと言われることがある。
B.	人から, 元気だねとか, 社交的と言われることがある。
C.	人から, おだやかだねとか, ほがらかだねと言われることがある。
A.	仕事が次から次と与えられると, どれもきちんとできなくてイライラしたり, 停滞する。
B.	仕事が次から次と与えられると, この程度でいいだろうと考えたり, 人にやってもらおう。
C.	仕事が次から次と与えられると, 優先順位や重大性に応じて重みづけをして行う。
A.	「～はこうしなければいけない」と原則や真の目的を固く守る方である。
B.	「これがダメなら, あれ」と一つの考え方にこだわらない。順調にできればいいと思う。
C.	自分の考えを活かしながら, 人と協調したり一致できる点を見出したりする。

それぞれの数を書いてください。

A 集中・固さ	B 注意転換・活発さ	C ゆとり・柔軟性

Abstract

Learning Styles and Feelings of Compatibility with English Education: Considerations Based on Feelings of Compatibility, Favorability and that of Effectiveness for University English Classes

Norio Ando^[1], Shuji Hasegawa^[1]

[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

The term ‘learning style’ refers to the view that different people learn information in different ways. When the learning style of a student matches the educational method in English class, it is thought he can learn effectively and easily. However, researchers have failed to find an effective method to match individual learning styles and educational methods. It is necessary, therefore, to make clarify the relation of effective classes and the feeling of compatibility. In this study, the authors attempted to find the relation between feelings of compatibility, favorability and effectiveness by administering a questionnaire asking university students about their feelings regarding English education at junior high school and high school. The results showed that when one of 3 feelings was negative, all of them tended to become so. As for the relation between emotional expression type and appropriate educational method, students of tensioned emotion type feel compatibility with English comprehension. Students of excited emotion type feel compatibility with active expression, while those of relaxed emotion type feel compatibility with human stories. Therefore, in order that students may feel enough compatibility with their English classes to learn, it may be important to provide learning activities which are tailored for students with different learning styles and to let them express suitable emotions.

Keywords: Feelings of Compatibility with English education, 3 emotion expression types, Learning style, Favorability, Feeling of effectiveness